

周辺からの記憶 17

～2014年 福島のこと～

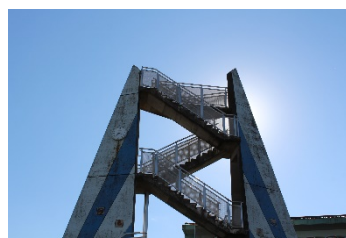
村本邦子（立命館大学）

7年目の福島。今年は、福島市でのプロジェクトに加え、浪江町でもプロジェクトができることになった。浪江町は、浜通り北部、双葉郡にある。原発事故によって、仮役場が二本松市に設置され、2万人以上の住民が避難した。2017年3月31日に全域避難指示は解除されたが、「帰還困難地域」が町内の大半を占めている。10月末現在で、人口18,075人6,913世帯のうち、居住人口は418人293世帯である（浪江町HP）。すでに移住して人口に入っていない人々もいるだろう。

今年は8月にも浪江に行ったが、今回は、その後9月20日によりよく再開通した浪江町の114号線を走った。帰還困難区域となっている津島・室原間の27キロで、これまでは通行許可証を持つ町民が昼間のみ出入りできるだけだったところ。二輪は今も通行不可で、出入り口にはガードマンが駐在している。帰還困難区域となっている場所を走るのは奇妙な気分で、途中、幾度となくガイガーカウンターがピーピーと大きな警戒音を鳴らした。毎時2.5マイクロシーベルトで鳴るそうだ。しかし、浪江と飯館・葛尾を結ぶ帰還困難区域内の399号線は今なお一般車両の通行止めが続いており、道が閉ざされていた。

浪江の方が案内してくださったのだが、原発から5キロほどの請戸地区へ行くと、茫漠たる空間が広がるばかりだった。震災後の1～2年、あちこちの沿岸部で見かけた光景だが、最近はあまり目にしなくなった。請戸小学校の時計は、2011年3月11日の3時38分で止まったままだった。学校はまだ再開しておらず、来年4月に新設の小中学校が開設するが、入学申し込みは5～6人だと言う。長い間、止まっていた人間の時間がゆっく

りと動き始める。その間にも、大自然は刻一刻と壮大なドラマを繰り広げていた。



2014年10月7日（火）研究会 県外避難者のこと

<NPO 法人和 Nagomi 理事長大塚茜さんのお話を聴く>

昨年の福島でのプロジェクトでは、「福島の支援者たちは、支援されるより、むしろ状況を伝えたいと思っている。福島を支援するというより、福島のことを学び、一緒に考えて欲しい」という提起があり、これを重く受け留めた。2012年、2013年と京都の避難者に向けたプロジェクトをやってきたが、2014年は、きょうと NPO センターから「一昨年は避難者向け、昨年は支援者向けの交流会をやったが、これらの役割は一定終わったと考えている。今年は、むしろ避難者たちから私たちが学ばせてもらう機会としたい」と提案があり、賛同した。

まずは背景の理解を深めようと、プロジェクト実施に先立ち、10月7日（火）の研究会で、京都の避難者支援をされている大塚茜さん（NPO 法人和 Nagomi 理事長）と皆川由起さん（ほっこり通信）を招き、「県外避難者の3年間」について話してもらった。

大塚さんは、2011年10月、京都に避難する人々の交流支援をする「福興サロン和 Nagomi」をスタートさせた。避難者推計10万人、うち福島からの避難者3.5万人とされるが、誰がどこにいるか、国も各都道府県も誰も把握していない。最初は、同じような境遇の人と交流したい、気持ちや情報を共有したいという人が多く、出会えるということだけで喜ばれた。2012年4月になると、新年度ということで避難者が増え、先輩が後輩の面倒を見るという感じのことも起こっ

た。

それからフェーズが変わって、少しずつ、個人の選択の問題、生き方や価値観の問題が前面に出てきた。みな避難生活がこれほど長期化するとは思わず、いつか戻りたいと思っていたが、もはや戻れないとなった時、いつまでも支援を受けて生活していくことが苦しくなってくる。もともと普通に暮らし、仕事や社会貢献をしていたのに、それらをすべてなくして人の世話にならなくてはいけないもどかしさ。それで、2012年9月、「キッチンNagomi」をオープンした。出身地の違う人々の食文化の違いが面白く、子ども達に何を食べさせたらいいのかという大きな命題もあって、皆で働ける場所にしようという感じで立ち上げた。

もともと就労支援のつもりだったが、それだけではなかったことがだんだんわかってきた。避難元によって立場や国の支援のあり方も違って、分断があり、支援団体も頭を悩ませているが、キッチン和の中だけで言うと、それがほとんどない。人生には社会的役割や貢献が大きな意味を持つ。のべ15人が働いているが、この店を何とかするために頑張ろうという共通の目標を設定できている。支援を受けるだけでなく、自分たちが能動的に動いて、事を生み出していくというのが良いのだと思っている。

3年半経ち、三極化している。ひとつは、帰ろうと思っている人、帰らないと思っている人、どうしていいかわからない人。もうひとつは、苦しい状況のなかで心がささくれ立ってしまった避難者たちと、そこから何とか建設的に行動していこうという人たち、やはりどうしていいかわからない人たち。それぞれに了解可能な反応であり、ピン

ポイントで支援していかなければならない。自分たちも迷いながら、一緒になって考えるが、最終的には自分で決めて引き受ける、自分の人生がこれで良かったと思えるところまでの力を回復するということだろうと考えている。

<ほっこり通信・皆川由紀さんのお話を聴く>

皆川さんは仙台の出身で、震災時、関西で子育てをしていた。同じ境遇、つまり関東や東北の出身で京都に住んでいる女性たちが集まって、何ができるか話し合い、京都での支援を紹介する情報誌「ほっこり通信」を始めた。5千部作って宮城、福島、茨城などに送る。今4号で、メンバーは避難者3人を含む10人。3人のうち一人は、パートナーも移住という形で昨年来て、京都で生活再建している。もう一人は、パートナーに移住する気がなく、子どもも多いので、今は戻って向こうで生活している。もう一人は、パートナーが関東にいて、子どもと避難生活を続けているが、この先どうするか悩んでいる。そんな状況。これから一番必要になってくるのは家をどうするか。今は無料で住んでいるところが1年後、2年後になくなるかもしれない、不安を抱えながら暮らす人々が多い。

鬱になったり、まいったりしている人たちには、臨床心理士に状況についての理解がないと、この3年間の経緯を話しているだけで疲れてしまう、余計にしんどくなるということがある。それで身近にいる支援者に重い相談が持ち込まれるが、支援者側も素人なので、しんどくなって、支援者たちが離れていった時期もあった。同じ志を持った者が集まって、次に何をしようと考えて

いるのが今の状況。少しずつ他の地域と連携して情報交換することができるようになってきたので、全国会議も視野に入れている。とは言え、実際にはなかなか大変。志はあっても、お金も人も力もついてこないというのが現状であるということだった。

お二人には2012年に出会っているが、アイディアに満ちたきめ細かで地道な活動に頭が下がる。

2014年10月 東日本・家族応援プロジェクト 2017 in 京都

10月8日（水）～13日（月）、東山いきいき市民活動センターにて、「東日本・家族応援プロジェクト in 京都 2014」を開催した。11日（土）には、茨城県から避難してこられた川崎安弥子さんと古部真由美さんを招いて、「災害時に家族に起こること～東日本大震災の経験から」というタイトルでお話し頂いた。災害が多発する昨今、家族に関しても災害への備えをしようという趣旨だった。





<川崎安弥子さんのお話を聴く>

川崎さんは、2012年1月、夫を故郷に残し、3人の子どもたちと京都に避難してきた。夫は沿岸部で漁協関係の仕事をしており、津波の衝撃と仲間の生存確認で頭がいっぱいの状態から、復興に向けて動こうと前向きな雰囲気も出てきたが、自分は放射能のことが心配で、ネガティブな思考になっていた。講演会など聞きに行って、放射能への不安はますます強くなったが、どうやって避難したらいいかわからず、あきらめかけていた時に、「ほっこり通信」を手にした。そこには、茨城県から避難した人たちの経験が載っていて、「避難できるんだ、してもいいんだ」という気持ちになった。

夫の理解は得られないまま、避難することにした。2012年5月に夫が京都に会いに来てくれた。子どもたちの嬉しそうな様子を見て、夫が帰った後しばらくは、自分のした決断に迷いがでて、落ち込んだ。3年経てば、放射能の危険性にも理解が進んで、避難したこともわかってもらえるようになると思っていたが、理解はまったく進まず愕然とする。国が判断して指示すべきことも個人の判断に委ねられ、夫婦や家庭に摩擦が起き、決断をした人、とくに母は責められる。そんなな

かで、2014年4月、高校1年生の長男が自分の意思で帰郷した。

子どもが病気の場合は、その子のために家族が団結できるが、災害の場合は、家族だけで家族を守れない。社会を変えなければと思うようになった。災害が起きるときに家族が一緒にいるとは限らない。それぞれに判断するしかない。何でも自分で何とかしようとした時期もあったが、自分の手に負えそうにないものは流れに任せようと思う気持ちもでてきた。できることとできないことを自覚して、背負い込むのをやめようと思うようになった。以前は、家族が一緒にいることが幸せだと思っていたが、今はそう思わない。

迷い苦しみながらも、自分で選択できることは選択する、選択できないことは流れに任せるというところに到達した川崎さん。仲間関係が重要になる自立の時期、自分の人生を選択した息子さんと、最終的に息子さんの意思を尊重した母親を称えたいと思うが、その心情を思うとやるせない。

<古部真由美さんのお話を聴く>

古部さんはグラフィックデザイナー。大阪出身で、13年間茨城に住んでいた。原発事故後、10日あまりで大阪の実家に避難した。勇気のいる決断だった。周囲から「どうして避難するの」と非難され、明確な理由を証明できず、葛藤が続いた。今も親戚から「いつまでいるの」と言われる。今では私の家族にはこれがベストだと考えているが、自分たち家族が決めた生き方であることを理解してもらえないことは悲しい。人に何を言われても「家族を守る」、それが正しい決断かはそれぞれだが、自分でしなければ

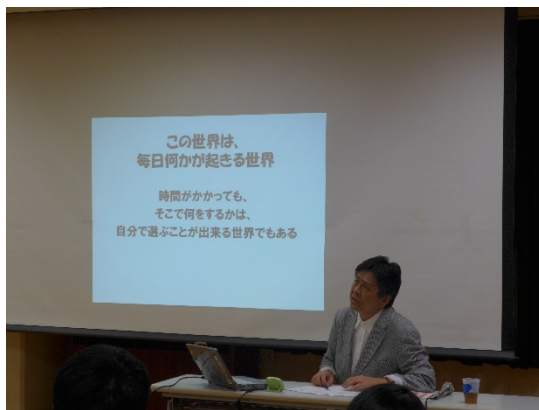
ならない決断である。

県外避難者を孤立させないよう、2011年、情報で支援する「まるっと西日本」を発足させた。支援情報誌を毎月2千部発行し、関西の避難者に自治体を通じて無料配布しているとのことだった。

＜村本からの話題提供＞

私からは、プロジェクトを通じて見聞してきた災害後の家族の問題を紹介した。①災害時・災害後、家族がバラバラになる可能性、②支援者の家族は後回しにされてしまうこと、③災害直後は一時的に家族の絆が強まるが、④時間経過とともに、災害前からあった家族の問題からほころび始め、負荷によって問題が大きくなる、⑤避難所や仮設住宅での女性と子どもの問題、⑥避難者たちの悩み、⑦放射線が家族の食卓にきしみをもたらすこと、⑧時間経過とともに家族の問題は日常のものとなっていくこと、⑨家族が安定していると子どもも安定することなど。

川崎さんも古部さんも、震災前にチェルノブイリの子どもたちと接点があり、それが決断をひとつ後押ししたとおっしゃったことが強く印象に残っている。事が起こる前に見聞きしたり学んだりしたことがいざという時の備えになるのだろう。今回は、本プロジェクトに新聞社とTV局が入った。決断にあたって、正しい情報が広くゆきわたることは不可欠である。マスコミには是非とも頑張ってもらい、今回のセミナーが来るべき災害に対するなにがしかの備えになればいいと思う。



2014年11月 水俣から福島へ

鹿児島大学で平和学会秋季大会が開かれた折、11月6日（木）～7日（金）、合宿形式の水俣フィールドワークに参加した。「グローバルヒバクシャ」分科会の企画で、水俣と福島を繋ぐ視点を提示する。4人の被害者の話を聴き、夜は相思社に泊まり込んで参加者たちと交流した。水俣とは縁があつて、これまでも自分なりに学んできたが、今回はかなりディープな水俣体験となった。お話をくださった方々のスタンスはそれぞれに異なっていたが、共通しているのは、水俣から悪い教訓が福島に持っていかれているのではないかという危惧だった。実際、環境省では、水俣の対応をしてきた人が福島に行っているそうだ。

起こり得るのは、事件の矮小化、隠蔽、被害者の分断であり、「地域復興」「問題の克服」といった語り口で収めてしまうこと。福島の後、水俣病資料館には「水俣は風評被害をどう乗り越えたのか」という展示が掲げられた。水俣病が利用されないようにしなければならないという。「水俣病の最初の失敗は、住民同士傷つけ合ったことだった。福島にはその繰り返しをして欲しくない。住民が悪いわけではない。最初に判断を間違うと、水俣と同じ方向にいつてしまう。原因は国と東電にあることをぶらさないよう、行政や東電任せではなく、自ら実行して欲しい。豊かな暮らしを求めることの裏返しであることを受留めて、1日も早く落ち着いた暮らしができるように努力して欲しい。行政任せではダメ。水俣も、行政に任せていてはダメというところから動き出した。少しでも参考にして欲しい」との言葉はパワ

フルだった。田中正造は、「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と言ったそうだ。

ここで、福島で活躍中のジャーナリスト 藍原寛子さんと知り合いになり、福島の情報がたくさん頂いた。12月のプロジェクトでは、院生3名と1日早く出発し、紹介してもらったところを訪問することにした。ちょうど鹿児島県議会が開かれていて、翌日、再稼働発言が出る予定ということで、藍原さんは翌朝早くに鹿児島へ発っていった。





2014年12月4日(木)～5日(金) フィールドワーク

3年目の福島。今年は、「福島に学ぶ」ということで、フィールドワークの時間を十分にとるため、院生たちと、いつもより1日早く出発した。7時半の新幹線に乗り、東京経由で新白河下車。タクシーで原発災害情報センターへ向かう。原発と言ったからなのか、マスクをした年配の運転手さんは一言も物を言わなかった。



<アウシュヴィッツ平和博物館>

原発災害情報センターは、アウシュヴィッツ平和博物館に隣接している。藍原さんの紹介で事前に連絡してあった小渕真理館長は、アウシュヴィッツ平和博物館で受付をしていた。やはりマスクをしている。日本のどこかにアウシュヴィッツ博物館があることは聞いていたが、「なぜ白河に？」と思う。



1988年より市民有志が、ポーランド国立オシフィエンチム博物館から犠牲者の遺品と記録写真を借り、「心に刻むアウシュヴィッツ展」として全国巡回し、10年で110回、延べ90万人の入場者を数えた。2000年4月、巡回展の有志によって、最初は栃木県塩谷町に博物館を作ったが、2003年4月、本格的な博物館建設のために、交通アクセスと自然環境に恵まれたここに移転・再度オープンしたのだという。2004年にはNPO法人化した。私もホロコーストには関心を持ち、アウシュヴィッツは2度訪れている。20分のビデオと館内展示を見て、隣の原発災害情報センターへ案内してもらう。



<原発災害情報センター>

庭はまだ除染中。「11月に重機が入って作業が始まったら、涙が出ました。自分の活動が剥ぎとられて。大切にしてきた芝生や花壇、全部剥がされて真黒になった」と言う。除染とはそういうことなのだと知る。

「好きな土に入れ替えられて喜んでいる人もいれば、庭に愛着があって除染をしないという人もいる。人それぞれ、意見はみんな違うと思う。だから話ができなくなってしまった」。つい最近、「もう我慢はしない、立ち上がる」というタイトルの集会があったが、「みんな3年間我慢していたんだね。私たちは毎日話すが、原発のことは学校でも禁句、話せない」。福島県や教育委員会の方針で、「環境創造センター」が三春町にできて、放射線安全教育が始まる。それに対して、「福島アクションプロジェクト」を立ち上げて反対運動やっているということだった。[\(http://fukushimaaction.com/\)](http://fukushimaaction.com/)

小淵館長が、庭のあちこちで放射線を測って見せてくれる。「測る場所で全然違うのよ。放射線に色がついていたらおもしろいでしょうね。空中を赤やピンクや黄色や青が浮かんで、景色に色がつくでしょ」とおっしゃる。そう言われると、測った数値に合わせて、色がプカプカ宙に浮かんでいくような錯覚を覚える。東日本大震災の後、「アウシュヴィッツ博物館をどうしよう、子どもたちに来てと言えなくなる」と思った。白河でも、この地域は線量が高く、1年経って、原発事故についても記録を残していこうと、理事長自ら除染作業をし、まずは建物を建てた。理事長は大工で、ボランティアと少しずつ作っているところ。

情報センターでは、ボランティアのEさ

んがお話をしてくださる。センターはまだ完成途上。資金不足で、ストーブはあっても灯油代がないと、寒いままだが、手作り感にあふれ、暖かい気持ちになる。Eさんの住まいは棚倉町なので、避難していないが、実家は富岡町で、すべて津波で流された。先日、富岡駅に行ったが、「大きな国道6号線が寸断され、そこから商店街、ゴースタウン。惨憺たるものだった」と言う。小湊館長も加わる。「線量計を持って入ると、大熊や富岡は高いが、双葉はここより低い。道路新しくしたから。町民だってゆらぐよね。でも、そこだけです。道路から脇には入れない。飯館も黒いビニールだらけ。黒は4千円、ブルーは9千円。黒は10年もつと言われたが、実際にはもうもたない。惨憺たるもの。置く場がない。仮置き場やら、仮仮置き場やら」。

センターでは放射能測定もしている。必ず数値は出る。でも、たとえば千葉のお米を測って見たらゼロだった。そういうことをやっていたら、安心ではなくても、ただただ大丈夫というのとは違って、どの程度のものか自分でわかる。

実感として、関連死の人が多くなっている。「元気だった人が自分の周りだけでも何人も亡くなっている。心筋梗塞とか心臓多い。仮設で亡くなる人もいる。いたたまれない」。「甲状腺は関係ない」と言うが、個人差がある。鼻血も、自分は出なかったが、動物保護で放射線量の高い所に毎日通っていた人たちは鼻血が出ていた。アレルギーもそうだが、放射線に敏感な人、そうでない人がいる。「わからないと言うのが正解、否定してはいけないと思う」。確かにそうだ。

保証金を巡る分断も大きい。たとえば、避

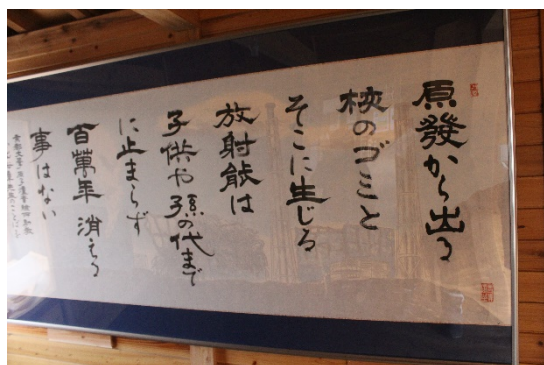
難指示で避難していると、一人月十万もらえる。いわきのスーパーに行くと、避難者は一目でわかる。「あんたら金もらってるでしょ」と、同じ県民同士でいがみ合っている。どんどん分断に追い込まれているし、これからもっと厳しくなると思う。基準は不明確。たとえば、富岡から郡山に避難した知人が2人亡くなった。90歳超えていたが、関連死とされ、「240万出たよ」と新車を買っている。そうすると、「何だ、やつらは」と言われる。でも、別の老人は出ない。あるいは、住めなくなったからと、家の保証金が1400万出た人がいる。すべて奪われ、仮設に押し込まれて、仕事もないから、パチンコ屋に並ぶ。大金を持たされ、人生を狂わされている。人生が一変したのは被害者だけではない。それまで反対運動していた人が、「力が及ばなかった」と、休みなく動いている。福島で生まれ育ってきた人と転入者とも違う。自然と一緒に暮してきた人への影響は大きい。それぞれの思いも違うので、足並みも揃わない。

福島は、歴史的には自由民権運動などリーダー的存在だったが、その後、置いていかれて、日本のチベットとまで言われた。そこに原発作りましょうと。双葉は海だが漁業ができず、何もなくて、原発ができて、出稼ぎに行かなくてすむようになった。雇用の問題が関わっている。第二原発も再稼働するかもしれない。それを望む人もいる。除染の仕事も安い。求人見ると1日1万円、女性も多い。福島辺りの夜のお姉ちゃんがいわきに行ったりしている。

避難している人たちを戻したい県の方針がある。来春、広野町に中高一貫校が開校する。有名人を臨時講師として雇って、それを

目玉に人を集めようとしている。広野自体は放射能は高くないが、高校卒業したら東電に勤めましょとやる。富岡の婦人会も東電がバックアップして、金遣いが荒い、「ずいぶんいい思いしたんでしょ」などと言われる。

そこで、にわかに、「カウンセリングしてもらいたいぐらいだね。私たち、もう頭が変だから」と言われ、苦笑するしかない。変なのは頭ではなく、現実だろう。



<NPO 法人ビーンズふくしま訪問>

新白河から福島へ移動、プロジェクトを共催する NPO 法人ビーンズふくしまの事務所に伺う。ビーンズふくしまは、もともと子ども支援をしていた NPO。初期の子ども支援は「保養」が多かったが、日常のなかの支援をと考えた。福島は避難生活が長引いた。2011 年の 3 月、4 月、福島は放射線の影響もわからず、物流も止まり、仮設設置も遅れた。仮設住宅も建つのに時間がかかるし、ものすごい数が必要だった。8 月頃まで、避難所やホテルなどにいた。そんなところからの支援だった。

故郷を離れて避難せざるを得ない、バラバラに仮設住宅に入って知らない人ばかりという状況も多かった。子どもたちは、避難生活のなかで 5 回も 6 回も転校し、友達とも離れ離れになった。それまで海沿いに三世代で暮らしていたようなスペースから、4 畳半 2 間のプレハブに来て、家族もバラバラ。狭い中で生活しているので、子どもが泣いたり暴れたりしたら丸聞こえのため、我慢しなければならないことが多く、ストレスもたまっていた。

家以外に子どもたちがいれる場所はないのかと考えた。集会所があるが、子どもだけで使うことはできず、大人が見ていられるかと言えば、今後の生活を考えると、そんなゆとりはなかった。福島は全員被災者と言えるが、福島市はインフラが戻ると比較的早く日常ができていたので、仮設住宅での居場所づくり、学習支援から始めた。2011 年の 9 月スタート。イベント的なものはあったが、日常に寄り添う支援がある方がよいのではと考え、福島大学の学生たちと協力して、最初は土曜の学習支援を始めた。

放課後支援で遊びや学習の支援。福島県は全部で仮設は百何カ所あるが、自分たちが関わっているのは比較的大きいところなので、他の仮設から来る子どもたちもいる。大人も含めて子どもたちを見守る力を作っていきたいと考えている。あさって、仮設支援チームは三春町で餅つきをやる。子どもたちの見守りを大事に、場の中で子どもたちを支えていく。学童保育に近いことをやっている。3年半続けてきたが、まだ2年は続ける。福島は、5年半経っても仮設が残っている見込み。仮設と周囲の交流が少なく、隔離された居留地となっているので、外部からの風を入れることが大事だと思う。

センター職員は15名。毎日、県内のあちこちで活動しているが、それでも足りていない。今日は4名のスタッフ。小学生は多くて20名だったが、今は5~6名となっている。中学生数名。小さな子どもがいる家族はみなし仮設(アパート)に暮らす方が多いので、震災後に生まれた子どもは少ない。17時から18時半は小学生、20時半までが中学生。県北ではゲーム禁止で、学習をしている。終わった後におしゃべりしたり、おやつ食べたりはする。

子どもたちの状態、1年目はひどかった。クラスによっては学級崩壊状態。最初の1年は、安心・安全、場の約束をして、「一緒に楽しいことをするためにルールを守ろうね」ということをやっていた。子どもたちも表現しようがなくてやっている。見てもらいたい。最近では学年が上がり大きくなってきたのか、それぞれの状況に応じて、「あの子行かないなら私も行かない」など、人数も減ってきた。ボランティアも確実に減っている。大学の時期があるので、マッチングは

大変。年間、放課後來れるのはやはり県内の学生。

<福島子ども支援センター>

福島子ども支援センターの仕事としては、福島県の委託を受けて、お母さんの心のケアなどやっている。県外避難の問題があって、2014年9月30日現在で46,645人(3県の合計55,021人)、うち子どもは13,308人。ピークは2012年3月。低放射線被ばくの長期的影響は未知であり、1年の迷いがあった。県内避難者は78,577人(福島県災害対策本部6月26日)。支援として、県外の交流会を開催している。県外に避難すると情報が入らなくなるため、福島の情報を提供する。県外の支援者にも正しい情報が必要。3年前の情報のまま、避難者の不安に寄り添っているかもしれない。不安の源が現実には変わっていることもある。たとえば、今年5月には、堺市に福島の状況を話しに行った。

福島の避難者も6万人から2万人に減り、4万人が帰ってきたが、抜け落ちた2年間の不安がある。196万人のうち県外に出た人は6万人なので、避難しなかった人たちに対する罪悪感がある。子育て世代が中心なので、親のケアとしてママカフェをやっている。福島、郡山、白河、南相馬、いわきの5箇所。当事者性の高いグループで、子育ての不安、遊ばせ方、食べ物の悩み、学校での指導に対する不満(福島産のものが給食に使われるなど)などが語られる。

福島県内の支援者の研修もやっている。ファシリテーター、虐待支援。スクールカウンセラーや母子保健などの派遣調整もやっているし、お母さん向けのベビーマッサージ

ジ、ヨガ、子どもたちへのリトミックや運動遊びなど、年間 900 人くらい派遣している。登録・紹介の講師をつなぐ。情報が集まってくるので、いろいろな団体をつなぐ役割を果たしているということだった。



< 仮設住宅での放課後学習支援 >

その後、二本松市安達仮設へ移動し、私たちも学習支援のボランティアをさせてもらった。16 時半から 19 時の間に、5 名の子どもたちが来た。安達仮設は大きく、浪江町の人々が 244 戸入っている。60 人くらいいる子どものうち約半分が登録しているようだ。夏休み前までは、たくさん来ていたが、夏休みをはさんで少なくなった。みんな塾に行っているとのこと。岩手の仮設とは違って、ほとんど皆、車を持っているようだ。なるほどと思う。

全体的にどんよりとした空気が漂っているが、個別に話し始めると子どもたちに笑顔も見られる。個人差はあるが、ボランティアがそれぞれの子どもについて教えると、落ち着いて宿題に集中することができる。終了後は、子どもたちもお迎えに来られた親御さんにも、そしてスタッフにもおやつがあって、ほっこりとした時間。

< 仮設住宅宿泊体験 >

この日の夜は、ボランティア宿泊用の仮設住宅に泊らせてもらうことになっている。院生 3 人、関東から来ているボランティアの男性 S さんとスーパーで鍋の買い出しをしてから、宿泊する福島市佐原仮設へ。こちらは小さな仮設住宅。四畳半二間で、お風呂も三角座りで入らなければならないくらい小さく、台所のガスコンロは 2 つあるものの、片方は、使うと壁が燃えるから使えないという。確かに、壁に焦げかけの跡がある。あんまりではないか。

鍋を囲みながら、S さんの話を聴く。元理科の先生で、2012 年の 1 月、新聞で福島教育委員会が学習支援のボランティアを募集しているのを見て参加。震災後、夏頃まで混乱状況になったため、勉強が進んでいないばかりか、逆行して忘れていっていた。

「これは大変だ」と思い、受験勉強の手伝いをした。自信をつけてもらえればと思った。翌年は来れなかったが、2014 年は 2 月ひと月、今回は 1 週間の滞在で来ている。地元退職教員にも呼び掛けたが、それぞれ個別事情を抱えていて、みんな無理だった。前はビジネスホテルに宿泊していたが、仮設住宅を使わせてもらえるようになって助かっている。

震災以前、理科の教員で、千葉から福島まで海岸沿いを 3 年にわたって発掘するという企画があり、福島原発のすぐ近くまで行ったことがあった。たまたまガイガーカウンターを持っていた教員が測ってみると、原発周辺でガーッと上がった。自分が大騒動したためかチェックされて、理由は不明のまま、その後、行けなくなった。東電から圧力がかったのだろうか。あの時、もっと

上手に問題にしていれば、こんな惨事にならなかったかもしれないという。S さんに責任があるとは思えないが、それでも小さな罪悪感を抱えているのだろうか。

地元の食材を買って、みんなで鍋を囲んでおしゃべりするというのは、楽しく暖かいひとときだったものの、いざ寝ようと、院生と 4 人で布団を敷いたらもうスペースはなしという状況で、一夜を過ごすのはなかなか大変だった。たとえば家族 4 人で暮らすとして、プライバシーもなく、子どもが勉強をするスペースもなく、これが毎日では本当にたまらないだろう。都会の小さなマンションに暮す自分と違って、ずっと大きな家に住んでいた人たちだ。実際、福島で見かける家は本当に大きくて、なかにはお城かと思ふものもある。

翌朝、3 時間に 1 本しかないバスを待つて街中へ戻った。



< 極久里珈琲 >

藍原寛子さんの紹介で、極久里珈琲店を訪ね、店主である市澤美由紀さんのお話を伺った。極久里は飯館村にあったが、被災して福島市内で営業を再開していた。

福島県の職員だった美由紀さんは、農業研修でホームステイをした縁で飯館村に嫁いだ。飯館は標高 450 から 600 メートル、何年かに一度は冷害に見舞われ、農業をやっても報われない貧しい村。40 キロ走らな

ければ町もないので、冬は出稼ぎするしかなく、大学進学率も低い。人々は飯館村出身を恥と感じていたが、町おこしの時代になり、前向きに考えたいということで話が盛り上がってきたのが昭和 60 年代から平成にかけて。若者の組織、「若妻の翼」というのもできた。子どもたちには、「飯館って素敵だね、いいところに生まれたね」と言われるようになって欲しいと思った。質素だけど豊かな暮らしとは何ぞやと皆で考えた。

美由紀さんは、子ども時代、ピアノを習い、いつも学校で伴奏をしていた。高校では合唱をやっていたが、高校 3 年生の時、全国 1 位になり、1 ヵ月ヨーロッパに行った。民泊して、男の人が台所に立つのを見てショックを受け、「こういう人でないと結婚したくない」と思った。男女平等で同格。でも、結婚してみて、農家には外仕事がたくさんあり、役割分担があって、自分にはできないことがあり、一緒に台所に立つだけが平等ではないと知った。3 番目の子どもが生まれた時、仕事をやめて、農家を手伝うようになったが、賃金はもらえない。自分の人生を開きたい、カフェをやろうと思い、東京で修行して山の中に店を出した。大阪の辻調理に通って、ドイツ菓子の勉強もした。5 年で 1 千万売り上げることを目標にしたが、1 年で到達。農村の風景のなかにポツンとある珈琲店は、予想以上に都会の人が評価したのだと思う。

そんな経過で店をやって 19 年で震災だった。嫁いで 30 年は飯館に暮し、あの土地で生きていく自分を一生懸命作ってきたのに、そういうものを全部奪われた。単に家を失ったというのではなく、生き方を全部否定されたと感じる。震災の時、最低の国だと思

った。今の政治が辛くて仕方ない。

でも、実際に生活していくためには、店を再開して、従業員の生活も保障していかなければいけない。怒りだけでとどまっていると自分の心も体もだめになってしまうから、行動だけはスカッとスタイリッシュに行きたい。震災前と変わらない自分の仕事のリズムを狂わせたくないと思った。4 月 11 日に計画的避難区域になると言われ、閉店して、16 日から移転先を探し始めた。2 台の焙煎機のうち 1 台しか持って来なかったが、7 月 1 日にオープン。昔からの従業員もいるし、ここで新しく雇った人もいる。みんな店主の思いを受けて頑張ってくれている。やはり、支えてくれたのは仕事。プライドもあるし、負けられない。店を福島市内に再建するため、現在、設計中という。

世間ではコミュニティが崩壊したと言われるが、崩壊してホッとしたところもある。しがらみとは内発的なもので、誰かが縛っているわけでもなく、自分で自分を縛ってしまう。解放された人もいる。今は、必要な時に自分で選んでコミュニケーションを取っている。若妻の会では、最初、ベルリン崩壊の年、19 人でヨーロッパに行き、5 回続けたが、今年の 7 月、19 人中 10 人が集まってまた行ってきた。本も出版し、今、第二弾で「25 年経った女たち」というのを編集している。

「これっておかしいよね」という感覚が大事なのに、今はそれをさせなくしている。机で学ぶだけでなく、生きていることで学ぶことに含蓄がある。自分がやりたいこと、今しかできないことをどんどんやっていかなければと、自分で決定してやってきた。震災のことを知ろうと努力しているが、個人

の人生に位置づけて震災を理解することが大事だと思っている。

若い院生たちは、美由紀さんの話に感銘を受けていた。いつも、震災を逞しく生き抜いている女性たちのストーリーを聞くと、それは単なる被災の話なのではなく、女性の生き方の物語なのだと気づく。世の中には素晴らしい女性たちがたくさんいるものだと思ふ。



2014年12月6日(土)~7日(日) 「東日本・家族応援プロジェクト2014 in 福島」

今年は初めて駅横の「子どもの夢を育むこむこむ館」でのプロジェクト開催となる。立地条件も良く、駐車場も完備されており、9時半からの開館だが、早くから子ども連れのお父さんや家族が並んでいる。ドラマワークには2家族、クリスマスカレンダー作りには、親子20人が参加してくれた。昨年度は5人の子どもたちが前年度に続けての参加だったが、今回、過去に来てくれた家族の姿は見え、場所が変わったこともあって情報が届いたのかなと気になった。遅れての参加者が多く、少しバタバタしたが、楽しいひと時だった。

夜は福島名物「円盤餃子」を囲んでの支援者交流会。福島に暮す現在について語られる。

表面上は日常を取り戻しているように見えるし、普段は目の前の仕事に忙しく忘れているが、ふと職場から窓の外に眼をやると、除染土の入った黒いビニール袋が見え、「ああそうだった」と思う。そんな日常と非日常が同時進行している。そんななかで、支

援者も、いつまでこの状況が続くのかと見通しがつかず疲弊している現状があるということだった。支援者も被災者なのに、目の前には支援を必要とする人々がたくさんいる。「福島のこと忘れられているのではないか、なかったことにされるのではないかと不安になる」「何をするというわけでもなく、福島に関心を持ち続けて、見守ってくれていると思うだけでも嬉しい」「長く来てくれることが力の源になる」とおっしゃっていた。

店を出ると、静かに雪が降っていた。翌朝は、一面、真っ白。最終日は漫画トークだが、雪のためかほとんど人がおらず、関係者中心にスタートするが、途中で何人かが遅れて参加してくれた。漫画展の評判は良いようだ。終了後、反省会をし、片づけをした。来年以降もこむこむ館でやっていくことができそうだ。





つづく